

発 刊 に よ せ て

霊長類研究所長 小嶋 祥三

霊長類研究所のとくに実験的な研究に、旧サル類保健飼育管理施設（略称、サル施設）、そしてその後身である現人類進化モデル研究センター（以下、センターと略す）が果たしてきた役割は非常に大きなものがある。確実な基盤のないところに、安定した研究成果は期待できない。2年前（2000年）の秋に野生捕獲ザルの研究利用を制限する方針が環境庁（省）から打ちだされた。日本中のサルの研究者がアップセットした中で、研究所はその直接的な影響を受けることがなかった。それはこの研究所が20年ほど前から自家繁殖体制を確立してきたからである。これはサル施設、センターの努力の賜物である。霊長類研究所には実験室の研究者もいれば、野外のサルを研究している研究者もいる。この幅広さが現在の飼育体制の整備、確立に大いに役立ってきたと思う。野生捕獲ザル問題でもこの多様さが議論を適切な道へ向かわせることを願う。

研究所は動物福祉の問題で苦い思い出をもつが、その経験を教訓にして意識改革が行われた。研究所は世界標準といえるガイドラインを策定し、サル委員会の機能を充実させた。センターは研究所におけるサル類の飼育の責任を明確にし、すすんでそれを背負った。このような前向きな対応にも、研究所に多様なスタッフがいたことが幸いしたように思われる。センターはこの道をさらに先に行く必要があるだろう。動物福祉と研究の倫理の充実、推進は、サルの研究を将来にわたって安定して行うための必要な条件である。センターの生命倫理領域は正しくこの目的のために設置された。実験のライセンス制の導入など、日本のサル研究の適正な実施の模範を示し、リードしていくことが求められている。サル類の飼育は研究の対象である。センター化ではサル施設時代の供給、サービス重視から研究に重点を移すことが求められた。新しい知識や技術を利用して、新しい研究用サル類を創出、育成する必要がある。それには研究部門の協力が必要だろう。研究所の持つ多様性がここでもプラスに働くことを期待したい。研究所はセンターが主体になるリサーチ・リソース・ステーション計画を持っている。手狭になった、そして緑が少ない刑務所のような放飼場から、広々して、樹木が生い茂る豊かな自然の中にサルを移すことを希望している。実現すれば、飼育頭数も増加し、共同利用研究を通して外部の研究者にも付加価値の高い研究成果（サル）を利用してもらえらるだろう。しかし、国立大学の独立行政法人化が迫り、大学附置の共同利用研究所は困難な時代を迎えようとしている。各大学法人が内向きになる中で、他の法人の研究に経費を出して協力する共同利用研究システムが今後どのような道を進むのか。研究所も、30周年を迎えたセンターも不透明な霧の中を突き進んでいこうとしている。